

Title	スピノザにおける「自己原因」について
Author(s)	中野, 影則
Citation	メタフユシカ. 34 p.41-p.51
Issue Date	2003-12-25
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66678
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

スピノザにおける「自己原因」について

中野 彰 則

一 「自己原因」についての消極的な解釈への批判

スピノザは『エチカ』第一部を「自己原因 [causa sui]」についての定義から始めている。スピノザにおいて、「自己原因」とは一体どのように考えられているのであろうか。そして、それがスピノザ哲学の体系において果たす役割とはどのようなものなのか。問題はまず「絶対に第一の原因である」(E1p16c3) 神ないし実体について、それが存在するための原因を問うことができるのかということである。例えばスピノザは、彼がデカルト哲学について解釈した『デカルトの哲学原理』において、デカルトがいわゆる『反論と答弁』における「第二答弁」の中で提出した公理の中から、いくつかを採用して彼なりに整理し直しているが、その十一において次のように述べている。

「それがなぜ存在するかという原因（あるいは理由）を求め得ないような事物は一つとして存在しない。デカルトの公理一を見よ」(PPCIaxII)。

スピノザが参照を指示する、デカルトの「第二答弁」の公理一の前半は、次のようなものである。

「そのものが存在するための原因は一体いかなるものであるかが、それについて問われえないようないかなる事物も存在することはない。すなわちこのことは神そのものについても問われることができるわけなのである」(VII, 164)。

このように、デカルトは「そしてデカルトを踏襲しているス

ピノザも」あらゆるものについて、それが存在するための原因を問うことができるとする。

しかし、ここである問題が必然的に生じてくる。すなわちスピノザやデカルトが言うように、それが存在するための原因をすべてのものについて問うことが可能であるとするならば、その原因の系列を遡行していった結果として神へと至り、そこへと至る道程同様、それが存在するための原因を神そのものについても問われなければならないことになる。したがって、「絶対に第一の原因である」神ないし実体についても例外なしに、それが存在するための原因がなければならぬとする場合、神そのものを問いに付すことになってしまうのではないだろうか。

こうした困難を解決するための解釈として、例えば「第一反論」の筆者であるカテルスは「それ自体による [a se]」という語について、「積極的に [positive]」解される仕方と「消極的に [negative]」解される仕方の二通りあると述べた上で、「積極的に」を「原因としての自己」自体から、「そして「消極的に」を「それ自体で、あるいは他のものからではなく」という意味に解釈し、カテルス自身は「それ自体による」という語を消極的に、つまり他のものからではないという意味に理解するべきであるとする¹⁾。また、「第四反論」の筆者であるアルノーも、神は「積極的に [positive]」自らに

よってあることはできず、ただ消極的に [negative]、すなわち他のものよってではなく、ある」(VII, 210)として、同様の主張を展開している。すなわち、カテルスとアルノーは、自らによってあるという「自己原因」を消極的な意味として、つまり「自己原因」とは「原因の欠如」しか意味しないのだと主張する²⁾。このように、彼らの考え方は、言わば「原因なしに」というような消極的な形で「自己原因」を解釈することで、先に述べたような問題を回避しようとするものである。しかし、これまで述べてきたように、デカルトとスピノザの二人が拠って立つところの前提を曲げることはできないのであるならば、以上のようなカテルスやアルノーらの解釈は、デカルトにとっても、デカルトを踏襲しているスピノザにとっても、認められないものである。

それでは、デカルトやスピノザは、カテルスやアルノーらの反論に対してどう答えるのであろうか。そこでまず、デカルトであるが、結論から言えば、彼は因果性を「作用因 [causa efficiens]」と「形相因 [causa formalis]」とに區別して、「自己原因」を「形相因」とする立場から問題を解決しようとする。つまり、神についても例外なしにそれが存在するための原因を問うことになってしまうという困難は、デカルトによるならば、「自己原因」の因果性を作用因に固執して考えることにある、というのである。

「自己原因」を作用因として理解することの問題点は、デカルト以前において、例えば「第一反論」や「第一答弁」の中でカテルスやデカルトが参照する、トマス・アクィナス『神学大全』第一部第二問において、次のような記述としてすでに現われている。

「そこには決して、自分が自分自身の作用因 [causa efficiens] である」ときものは見出されもしないし、また見出されうるべきはずもない。もし仮りにかかるものありとすれば、このものは、自分が自分自身よりも前であることきものたることになるわけであって、こうしたことはまさしく不可能なことからだからである」。

これに対して、デカルトは「自己原因」についての不可能性を否定するが、「作用因 [causa efficiens] の意味が、時間的に結果よりも先のものである原因や、あるいは結果そのものとは別箇のものである原因に、局限されるときには、その言明〔作用因としての「自己原因」の不可能性〕が真理である」(VII, 108 括弧内引用者) ことは認める。というのは、デカルトもトマス同様、「同一のものが自己自身より先のものであることもありえないし、自己自身とは別箇のものであることもありえない」(ibid) と考えているからである。

このように、作用因についてのデカルトの見解は、前述のトマスの見解と何ら変わるところはない。しかしその帰結として、デカルトは「自己原因」を消極的なもの、すなわち原因のないものである、と認めることはしない。彼は、「自己原因」をいかなる原因も持たないものと理解している人々は、それを積極的な根拠のために肯定しているのではなく、そのもののいかなる原因も彼らが認められないためにそのことを肯定しているに過ぎないとして批判する。先ほども述べたように、彼らの問題点は、デカルト曰く「作用因の固有な、そして厳格な意味にしか心を向けないために」。「他の類の原因が作用因と類比をもつことに気がつかない」(VII, 109) というところにあるのである。そのような解釈に対して、デカルトは次のように述べる。

「自然の光のまさしく言い立てるところはしかし、なぜ存在するか、と問い求めることの許されないようないかなる事物も存在しないということ、いうならその作用因を探求すること、もしくはそれが作用因をもたないとすれば、なぜそれを必要としないのか、を要請すること、なのです」(ibid)。

デカルトはまた「第四答弁」において、この引用について、

神が自己自身の作用因であることを否定し、作用因を必要としないものが存在すると考えていることを示すものである、と述べる⁶⁾。デカルトはここにおいて、「自己原因」を消極的なものとして解釈する立場のように、神が存在するための原因を「必要としない」、と言っているのではないことに注意しよう。要請されているのは、神が作用因という意味での原因をなぜ必要としないのかということである。すなわち、神が作用因という意味での原因を必要としないことを認めても、やはりそれがなぜ存在するのかという問いそのものは消えることがない。デカルトが疑問を呈しているのは、「自己原因」の因果性を厳密な意味における作用因として考えるということなのである。

二 「自己原因」に関するデカルトの解釈

それでは、デカルトは作用因としては理解されない「自己原因」の因果性をどのように解するのであろうか。

「〈自らの原因 [sui causa]〉」という言葉は、いかなる意味においても、作用因について知解されることはできないのであって、神の汲みつくしえない能力が、原因を神は必要としないことの原因ないし理由 [causa sive ratio] で

ある、と知解されうるにすぎません。そしてその汲みつくしえない能力、言うならその広大無辺な本質はこのうえなく積極的なものなのですから、それゆえに私は、神が原因を必要としないことの理由ないし原因は、積極的である、と言ったのです」(VII, 236)。

あるいは、われわれが先に引用した「第二答弁」の公理一の前半の続きにおいては、次のように述べられている。

「その存在の原因を神についても問うことができる」が、だからといって何もそれは、神が何らかの原因を存在するというためには必要とする、ということなのではなくて、その広大無辺性そのものが、何らの原因をも神は存在するのに必要としない、その原因ないしは理由 [causa sive ratio] であるからなのである」(VII, 164、括弧内引用者)。

このように、デカルトは神が「自己原因」であることについて、それが「消極的に」ではなく「積極的に」であることを認めた上で、「自己原因」とは作用因として理解される因果性によるものではなく、そしてまた神が原因を必要としないことの「原因ないし理由」は、「神の広大無辺な本質」のためであるとす。そして「第四答弁」において、次のように

述べる。

「私は、神が存在するために、また維持されるために、作用因を必要としない」ということの形相因 [causa formalis] を、言うなら神の本質から探り出された理由 [ratio] を、有限な事物がそれなくしては存在しえないところの作用因と対比してきているのですから、到るところで形相因は作用因とは別箇のものであることが私の言葉そのものから認識されるのです」(VII, 236)。

「他によってあるものは、いわば作用因によるがごとくにして、他によってあるのですが、自らによってあるものはしかし、いわば形相因によるがごとくにしてある、言いかえるならば、作用因を必要としないような本質をもっているから、ある、というように形成するのです」(VII, 238)。

ここに至って、「自己原因」の因果性とは作用因ではなく形相因であることが明らかになる。「そのものが存在するための原因 [causa] は一体いかなるものであるかが、それについて問われえないような事物も存在することはない」というデカルトの言明は、正確には「有限な事物」が存

在するために必要とする原因 [causa] に適用されるべきものであって、神が存在するための原因とは、神それ自身に根拠を置くような、神の本質ゆえに形相因であるという理由 [ratio] に置き換えられるのである。例えばアルノーが三角形の和がその本質ゆえに二直角であるのと同様に神はその本質ゆえに原因なしに存在するとするのに対して、デカルトは、神はその本質ゆえに存在する理由があると考えるのである。

こうしてデカルトは、「自己原因」の因果性を形相因に、それ以外のものの因果性を作用因というように、区別して理解する。すなわち、あるものが存在するためには「原因」を必要とするのであるが、「自己原因」たる神はそれが存在するためには、作用因としての「原因 [causa]」ではなく、形相因としての「理由 [ratio]」があるとされ、そのことによって、「自己原因」を「原因なしに」として消極的に解釈する立場を退けると同時に、「自己原因」としての神についても、それが存在するための原因についての問いを可能にしている。しかしあくまでも、この場合の原因とは厳密な意味としての原因ではなく、それはもはや理由と呼ばれうるようなものなのである。「第四答弁」において繰り返し述べられているように、「自己原因」についてのこのような考え方の導出を、デカルトは厳密な意味における作用因との「類似 [アナロジー]」によるものと称して理論付けし、それによつ

て「自己原因」を理解している。^⑧すなわちデカルトによれば、「自己原因」とは直接的な仕方において把握されるものではなく、作用因との「類比」によって導き出された形相因として理解されるのである。「自己原因」としての神が存在するためには「原因」を必要としてであるかのように〔すなわちその因果性が作用因であるかのように〕自己による原因と言われうるのは、実際にはそれが存在するための「理由」を必要としているということなのであり、したがって「自己原因」は作用因としてではなく形相因として考えられるのであって、そしてそれは作用因とのアナロジーに基づいて導き出されるのである。^⑨

三 「自己原因」に関するスピノザの解釈

(一) 『エチカ』における存在するものの原因についての公理
それでは、スピノザは「自己原因」をどのように考えていたであろうか。われわれが先に見たように、スピノザはデカルト哲学について解釈した『デカルトの哲学原理』において、デカルトが『反論と答弁』における「第二答弁」の中で提出した公理を採用して、すべてのものについてそれが存在するための原因を問うことができるということを踏襲していた。それは『エチカ』においても同様である。例えばスピノ

ザは、実体が必然的に無限であるという定理についての長い備考において、四つの注意を挙げているが、その三において次のような注意を述べている。

「存在するものの中には、それが存在するある一定の原因が必然的に存することに注意しなければならぬ」(E1p8s2)。

ここでは何かが存在すると言われうるためには、その何かについての原因が存在しなくてはならないということが述べられている。スピノザは、それが存在するために原因を必要とするものについて、特に何ら限定を付してはいない。すなわちそれが実体に該当するものであるとも様態に該当するものであるとも言われてはいないのである。このことは、存在するものの原因がどこに存しているのかということが述べられている、続く第四の注意からいっそう明確になる。

「最後に注意すべき点は、あるものが存在するその原因は、存在するものの本性ないし定義自身のうちに含まれているか（これは存在することがそのものの本性に属する場合である）、そうでなければそのものの外部に存していないければならないということである」(ibid.)。

これらのことから、様態についてのみならず、実体すなわち神が存在するためにも何らかの原因が存在しなければならぬということが理解される。実体と様態の存在についての因果性の相違点はその原因が内部にあるか外部にあるかということであり、様態の存在する原因が「そのものの外部に存して」いるのに対して、「存在することがそのものの本性に属する」実体の原因は「存在するものの本性ないし定義自身のうちに含まれている」ということになる。したがって、以上のことから、実体であろうが様態であろうが、それらが存在するためには原因が存在しなければならぬということが理解されよう。『エチカ』のスピノザにおいても、デカルトや『デカルトの哲学原理』のスピノザ同様、「自己原因」としての神ないし実体という概念について考える時、そのような神ないし実体にとってのそれが存在するための「原因」を問うことは可能なのである。

それでは、その際の因果性とは一体どのようなものなのであろうか。まず、神ないし実体以外のものについては、例えばスピノザは、『形而上学的思想』において「創造とは作用因 [causa efficiens] 以外に何らの原因も協力しない活動である」(CM 2/10)と述べ、あるいは『エチカ』において、「神は無限の知性によって把握されるすべてのものの作用因

である」(E1p16cl)あるいは「神はものの存在の作用因であるばかりでなく、またものの本質の作用因である」(E1p25)と述べているように、「有限な事物」が存在するための因果性については作用因しか認めていない。その他の原因、例えば目的因 [causa finalis] のときものも実際には作用因であるというように、認められていないのであって、デカルトと同様、確かにスピノザにおいてもまた神ないし実体以外のものに関しては、それが存在するための「原因」とは作用因に他ならない。

(二) 「自己原因」に関するデカルトとスピノザの相違点

それでは、「自己原因」の因果性についてはどうか。スピノザが神の存在証明を行っている第一部定理一におけるその第二の証明を見てみよう。

「すべてのものについてはなぜそれが存在するか、あるいはなぜそれが存在しないかの原因ないし理由 [causa seu ratio] が指示されなくてはならない。例えば、三角形が存在するならば、なぜそれが存在するかの理由ないし原因がなければならぬし、存在しないなら同様にその存在することを妨げたり、その存在を排除したりする理由ないし原因がなければならぬ。だがこの理由ないし原因はもの本

性のうちに含まれているかそれともその外部にあるかそのどちらかでなければならぬ。例えば、なぜ四角の円が存在しないかの理由は四角の円なるものの本性自身がこれを物語る。つまりそうしたものの本性が矛盾を含むからである。これに反して、なぜ実体が存在するかということとはやはり実体の本性のみから出てくる。すなわちその本性が存在を含むからである」(EipIdem)。

スピノザはここでもデカルトの公理を導入することから始めているが、そこに若干の修正を付け加えている。すなわち、存在するために何らかの原因ないし理由があるというだけでは十分ではなく、存在しないことについての原因ないし理由が存在しなければならぬと考えているのである。ただし、その修正そのものによって、スピノザは本質的にデカルトの公理と意見を異にするようになるというのではない。デカルト同様、スピノザもそれが存在するための原因を神についてさえ求めるといふことには変わりない。そしてまたスピノザは、そのものが存在することあるいは存在しないことの原因ないし理由は、すでに第一部定理八の備考二で述べられていたように、そのものの外部にあるか内部にあるかのどちらかであると述べる。三角形の存在はそれが存在するならば、それを存在させる「原因ないし理由」が外部にあり、それが存在しない

のであれば、その存在を妨害しあるいは排除する「原因ないし理由」がやはり外部にあるのである。そして、四角形の円のごときその概念が矛盾を含むものは、それが存在しないことについてそのものの内部にその「理由」があると述べる。同様にまた、実体が存在するための「原因ないし理由」として、「実体の本性」すなわち「その本性が存在を含む」ということが挙げられるのは、先ほどのデカルトの議論に即して言えば、その内部に「理由」があるからなのである。それゆえ、当然の帰結として、スピノザにおいても、「自己原因」としての実体は、それが存在することの原因を外部に求められるのではなく、そのものの内部に求められるのである。「自己原因」についての定義として「その本質が存在を含むもの、あるいはその本性が存在するとしか考えられえないもの」(Eideti)とされ、あるいは定理七の証明において「実体は他のものから産出されることができない。ゆえにそれは自己原因である。すなわちその本質は必然的に存在を含む。あるいはその本性には存在することが属する」(EipIdem)と述べられるのは、そのためである。すなわち、神ないし実体が存在することの原因ないし理由に関して、デカルト同様に、スピノザにおいても神はその本質ゆえに存在すると言われるのである。

だとするならば、われわれが問題としなければならぬの

は、スピノザが「自己原因」をデカルト同様に、形相因として考えていたのかということである。すなわち、「他によってある」ものが作用因によってあるのに対して、「自己によってある」ものが、そうした作用因とのアナロジーによる形相因である、というように因果性を区別して、あるいは「自己原因」を作用因という因果性の極端な事例として、あるいは「自己原因」としての「自己原因」を「作用因のごときもの」として因果性のある種の例外のように考えていたのであろうか。確かに、「自己原因」についての定義や定理七の証明にあるように、「自己原因」が「本質に存在を含む」ために、そのように言われうるのであれば、デカルト同様、「自己原因」を形相因と見なしていると考えられるかもしれない。たとえスピノザがデカルトのようにそれを形相因であるとは明言することはないとしても、実質上はスピノザもデカルト同様に「自己原因」を形相因と解釈している、とすることは可能であるだろう。しかし、この点に関しては、スピノザはデカルトとは多少事情が異なっているように思われる。というのは、スピノザは次のように述べているからである。

「神が自己原因と言われるその意味において、神はまたすべてのものの原因であると言われなければならない」
([Ep25s]).

先にわれわれが見てきたように、デカルトにとって、存在するすべてのものについてそれが存在するための原因を問うことができるとするとき、厳密な意味においては、神はそれが存在するための原因「causa」を持たないが、それが存在することについての理由「ratio」があり、「自己原因」の因果性とは作用因とのアナロジーによる形相因として考えられていた。すなわち、神は「自己原因」ではあるが、作用因がその結果の原因であるということとは別の意味においてであって、それはその本質ゆえに形相因であるという意味において「自己原因」なのであった。ところが、スピノザは、神が「自己原因」であるのと同じ意味において、すべてのものの原因であると述べる。すべてのものの原因であるのと同じ意味において、神は「自己原因」であるというのではない。それはそのことによって、作用因として理解される因果性からアナロジーによる「自己原因」の導出を拒否する。スピノザは神がもの原因であるということを「自己原因」という因果性の様相で考えているのであって、あるいはあらゆる存在のあらゆる因果性を単一の「自己原因」という因果性の下で考えているのである。スピノザの「原因ないし理由[causa seu ratio]」という等式の意味もそこにある。このような因果性の一義性の下では、存在するものの原因が作用因

として理解される因果性における原因 [causa] であるのか形相因として理解される因果性における理由 [ratio] であるのかということは意味を持たない。

四 むすび

「自己原因」をどのように考えるかということについて、例えばスコラ哲学においては、それを消極的に、すなわち「自己原因」とはただ原因のないものであると解釈されていた。それに対し、デカルトは、すべてのものについてそれが存在するための原因を問うことは可能であるという公理を示し、「自己原因」についてもそれは同様であると主張した。さらにデカルトは、「自己原因」を単にその原因が考えられないものというように消極的にとらえるのは、それが「自己原因」を厳密な意味での作用因として考えているためだからであるとして、「自己原因」を積極的に解釈し、作用因についてのアナロジーから、「自己原因」を形相因としてとらえた。そしてそれに伴って、神が存在するための「原因」は、その本質が存在するためであるという「理由」へと置き換えられるのである。

スピノザも、デカルト同様に、「自己原因」を積極的な意味において把握する。すなわち、神についてもその存在の原

因を問うことは可能であると述べるのである。ただし、その因果性がどのようなものであるのかを考えるとき、スピノザがここでもデカルト同様に、「自己原因」を単に形相因として考えているとする解釈をとることはできない。というのは、作用因とのアナロジーから、それとは別の意味において「自己原因」を考えるのではなく、「自己原因」と同じ意味において、神はものの原因であるのだ、とスピノザは主張するからである。スピノザは「自己原因」をあらゆる因果性の原型とすることによって、結局のところ、作用因か形相因かという二者択一を廃棄してしまう。デカルトは「自己原因」に関して、作用因の領域についての拡大解釈を行うことでその問題を考えたが、スピノザはそれを不十分であるととらえて、「自己原因」を直接的に思考することで、実体と様態のような実在性のレヴェルに平行している、形相因と作用因という因果性についてデカルトが行った区別をなくしてしまう。このような、「自己原因」をあらゆる因果性のモデルにするこ

とによる原因の一義性が目指すものとは、統一された因果性の下で「したがって原因と結果として」神ないし実体と様態を一つの様相で考えること、つまり「内在」という様相の下で考えることに他ならない。また仮に、デカルトのように因果性が区別されることなく、どちらかの因果性での統一を考

えるとすれば、すなわち、例えば一方において因果性が作用

